

美悠と僕の夏の日　　（その二）

（あらすじ）

夏休みに家庭の事情で祖母の家に泊まりに来た【僕】。

祖母の家には僕を慕う年下の親戚の女の子、美悠が暮らしていた。

性的なことに今日にが湧いてくる年頃の僕は、美悠に色々とエッチなことをして夏の思い出を作ろうと画策する。

（登場人物紹介）

【僕】

家庭の事情で祖母の家に遊びに来ている。先日無事に美悠で精通することができた。

性的なことには興味津々で、美悠と沢山エッチなことがしたいと考えている。

【美悠】

僕の一つ下の親戚の女の子。

先日寝ているうちに僕によって処女を奪われた。

明るく可愛い女の子で、黒髪でツインテール。

僕のことを大好きで、一緒に遊ぶのをとても楽しみにしていた。大抵の言うことは聞いてくれる。またエッチに関しては殆ど性知識もなく、まだよくわかっていない部分も多いが気持ちいいのでかなり肯定的。

（本編）

初めて美悠とエッチなことをした翌日の夜も、僕は変わらず眠っている美悠の両足を開いて、彼女の大事な部分におちんちんを入れて腰を振っていた。

「うっ、美悠……！」

名前を読んでも反応が返ってくることはない。

今日も僕と美悠はお風呂と、布団の中でお互いに触りっこをして気持ちよくなった後だから、疲れているのだろう。

彼女が寝入ってから何度も名前を読んで、完全に起きていないことを確認してから僕は美悠を犯していた。

美悠のおまんこは少し弄っただけでとろりと涎のように汁を垂らし、僕の未成熟なおちんちんを受け入れる準備をすぐに整えてくれる。もっとも、美悠のアソコもとても狭く、半分ぐらいを挿入してはゆさゆさと腰を振ることしかできない。

「ん、ん、ふっ、ふう」

美悠の横に手を付いて、覆いかぶさるようにしておちんちんを押し込んでいく。

美悠の狭い膣圧で僕のおちんちんは皮が剥け、ひりひりした痛みと全体がねっとり温かくてキツキツの何かに包まれる感触が強く伝わってくる。

そんな状況だから、僕が限界を迎えるのにはそれほど時間は掛からない。情けないことに、僕は今日もう二回目の射精であるにも関わらず、美悠の膣内に挿入して一分と持たせることもできないでいた。

「うう、出る……！」

できるだけ小声でそう言いながら、腰をぐっと押し付ける。

「あ、んっ、んんっ！」

美悠の身体もびくびくと戦慄き、彼女のアソコがきゅーっと僕の精液を搾り取るように締まっていく。本当に寝ているのかと疑いたくなるようなタイミングだった。

僕は美悠の中にたっぷり射精しながら、彼女が起きないようにと両手で身体を支える。すぐ目の前に綺麗な顔があって、たまらず唇にキスをした。

瑞々しい果実のような美悠の唇を味わい、舌を伸ばしてその中に侵入する。

美悠の口の中は暖かくて、彼女の唾液は不思議と甘い味がする。寝ているため殆ど動い

ていないそれを舌で突くだけで、柔らかさが伝わってくる。

勿論二回射精を終えただけでは僕の性欲が収まることはない。

美悠に入ったままのおちんちんは、射精を終えて一瞬は萎えたものの数秒もしないうちに復活し、元の硬さを取り戻していた。

「美悠、もう一回するよ……」

その言葉に何の意味があるのかは僕自身にもわからない。そう言っておくことで、美悠の同意を得ていることにして自身の罪悪感を和らげようとしたのか、それとも返答がないことを確かめようとしたのか。

とにかく、僕は美悠の膣内を味わうために再びピストンを再開した。

子供同士なのでそれほど激しくはない、控えめな腰の動きだけど、美悠のおまんこは僕がおちんちんを抜こうとすると締め付けて離さないようにして、入れるときには柔らかく受け入れてくれる。

当時の僕は名器と言う言葉を知らなかったけど、多分美悠のアソコはそう言う類のものだったのだろう。

「美悠、ほら……気持ちいいよね？ 美悠っ」

気が付けば僕はすっかり美悠の身体に溺れていた。

彼女のおまんこから味わう快樂は、当たり前だけど子供の僕が他に味わったこともないようなものだったからだ。

まだ大人のように理性も発達していない子供がそれを知ってしまえば、抗うことができないわけがない。

一心不乱に腰を振る。

いつの間にか僕の息は荒くなり、汗が飛び散って美悠の布団を濡らしていた。

美悠のアソコからも絶えず彼女のお汁が垂れて、シーツに染みを作っている。昨日の夜はこれが原因でバレないか心配だったけど、起きるころには寝汗と混じっていたし殆ど乾いていたので気にもならなかった。

「ん、あつ、んつ、あ、あつ」

半開きになった美悠の口から喘ぎ声が漏れる。

昨日の今日で、美悠は確実にセックスで快感を得始めていた。

実際今日もお風呂で美悠の身体を触っていると、何度も「気持ちいい」と言っていたぐら이다。

でもまだ美悠に対してセックスを申し込むことは難しい。僕自身が、どう誘っていいかわからなかったからだ。

だからと言って一度知ってしまった快感を我慢することもできない。だからこうして、彼女が眠り込むのを待って卑怯なことをしているのだ。

また美悠の膣がきゅっと締まる。

僕は不意に着たそれに我慢できず、美悠の膣内に二度目の射精を放ってしまった。

「ううっ！」

おちんちんが震え、脈打ったびにおしっこを更に強烈にしたような気持ちよさが全身に広がっていく。

びゅくん、どくんと美悠のお腹の中に遠慮なく白い液体を吐き出した僕は、全身が軽い倦怠感に包まれた。

「……ふう」

このまま美悠に抱き着いて眠ってしまいたいところだけど、そう言うわけにはいかない。彼女のおまんこからおちんちんを抜くと、やっぱり昨日と同じでトロっと僕の出した精液が逆流してきた。

僕はその光景を、少しの間見入っていた。美悠の身体の中を僕の精子で汚してやったという事実が、妙にいやらしく思えたからだ。もう一つ、今日は血が出ていないか確認したかったというのもある。

幸いにして血は出ておらず、僕は一安心する。

精液の逆流を見ていたらまたエッチな気分が復活してきたけど、僕自身結構体力を使って眠気の方が勝っていたので、ティッシュで美悠のアソコを拭きとって今日は終わりにする。パジャマを着せてあげて、僕も同じようにパジャマを着てから自分の布団に戻っていった。